● 石の宝殿　概説

岩山をくり抜いた穴にほぼ直方体の巨石が池に浮いたように鎮座する石の宝殿（生石神社裏手）と南側 400m には
日本三奇の一つ生石神社の裏手に鎮座する切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような横 6.4m、高さ 5.7m、奥行 7.2m の巨大な石造物がある。「石の宝殿」と呼ばれ、水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれていますが、多くの謎につつまれ、 いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物。
また、すぐ南側には 古くは仁徳天皇陵の石棺など数々の石棺にも使用された軟質で加工しやすい竜山石（宝殿石）の採石場があり、壮大に岩肌を垂直に覗かせた風景を眺められる。

生石神社の社伝によると、

「神代の昔　大己貴命（大国主命）と少彦名神が出雲国から播磨国に来た際に石の宮殿を造ろうとして一夜のうちに現在の形まで造ったが、途中で播磨の土着の神の反乱が起こり、宮殿造営を止めて反乱を鎮圧した。しかし、夜が明け夜明けとなり此の宮殿を正面に起こすことが出来なかったが、「たとえ此の社が未完成になっても、霊はこの石に籠もり　永遠に国土を鎮めん」と言われたと伝えられ、それ以来此の宮殿を「石の宝殿」、「鎮の石室」と称している」

と伝えられている。

この石室は、三間半（約７メートル）四方で棟丈は二丈六尺（約６メートル）の三方岩壁に囲まれた巨岩の宮殿で、池中に東西に横たわって浮く姿である。この工事に依って生じた屑石の量たるや又莫大であると推察され、一里北に在る霊峰高御位山の北側に大量にある屑石がそれであるとも言われている。
池中の水は如何なる旱魃にも渇することなく海水の満干を表わす霊水と言われている。

● 石の宝殿　播磨風土記の記述　記紀には記載がない

播磨風土記の印南の郡大国の里の条には、以下の話が記載されている。
『原の南に、石の造作物がある。その形は家屋の如くで、長さは二丈、幅は一丈五尺で高さも同様である。
その名号を大石という。言い伝えによると聖徳大王の御代に弓削の大連が作った石であるという。』

また、この石の宝殿とそっくりな石造物、「益田岩船」（推定 800t、高さ 4.7m以上、横 11m、奥行き 7.2m、標高約 130m）が奈良県橿原市の橿原ニュータウン内、白橿南小学校の西の丘陵（岩船山）の頂上付近にある。 初期大和の中心部葛城と明日香を分ける丘陵地の丘の上である。完成すれば、ほぼ同じ形状となり、横倒しの状態での製作、見晴らしのいい丘の中腹の設置場所などの条件もほぼ同じである。本当に謎の石造物である。
また、この播磨と大和のつながりについても　イメージがさらに広がってゆく。